



IRCN

国際交流情報

International Relationship Committee News

第14号

2017

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

トピック：いまわが国で取り組まれている国際的な美術・図工科教育の糸口

2017 年春・夏期号

目 次

I . 実直に国際交流の可能性と接点を探る

アートリンクによるアメリカとの国際交流

松本裕子

〔概要紹介〕 広島大学附属三原中学校は、海外国際交流校との連携事業「アートリンク」に参加し、アメリカの小中学生と同じテーマで作品を制作し、相互鑑賞活動を継続している。

毎年1年生の美術の授業で作品の制作に取り組んできた。これまでのテーマは、「文化の光」「大切な瞬間」「食文化」「コミュニティー」「チームワーク」で、どれも生徒にとって身近だが、制作するとなると文化的価値を再認識させるものであった。

パートナークラスから作品が届いたら、「文化の探偵になって」をキーワードに、「文化・風習のよさ、相違点・共通点、表現の工夫」等の視点で鑑賞している。



贈られてきた作品を鑑賞する生徒

ニュルンベルクのバイエルン産業博物館 における附属美術工芸マイスター・コース

針貝 綾

〔概要紹介〕 1901年から1904年までの間に同博物館には美術工芸マイスター・コースと手工業者のためのマイスター・コース（4つの家具職人コース、4つの靴職人コース、3つの建築・美術金具職人コース）が開設された。そこに新風を吹き込んだのが1888年バイエルン産業博物館館長に就任したフォン・クラマーであった。

クラウス・パーゼによれば、彼は優れた芸術家たちによる「新しい動き」を称え、その「近代美術工芸運動の指導者や先駆者たち」の助力を得てニュルンベルクの美術工芸家たちが歴史的な様式や伝統的な手法から脱却し、それによってニュルンベルクの経済が活性化することを望んだ。



セバスチャン・シュローベンハウザー《戸棚》1907-08年 所蔵：ゲルマン国立博物館、ニュルンベルク

II . シンポジウムを通して国際交流の実りを探る

＜東京造形大学 創立50周年記念シンポジウム＞

美術と美術大学の社会的役割

齋藤亜紀

〔概要紹介〕 昨年（2016年）11月12日～27日、東京造形



東京造形大学の活動と歴史を紹介する冊子

大学創立 50 周年記念事業の一環で美術学科卒業生による展示が行われた。

オープニングシンポジウム「美術／芸術／アートの形成—美術大学の役割」で司会を務めた東京造形大学の母袋俊也教授から美術大学が社会での役割を果たすためには、教育の目標を日本や世界の今のアートシーンに向けなければならないとの考えが述べられた。

またクロージングのシンポジウム「教育がつなぐ—社会、創造、造形。—」では、「美術がどのように社会に貢献してこられたのか」、「造形教育の未来とは？」といったテーマが取り上げられた。

＜ドイツ図工科教育リサーチ・フォーラム報告＞

ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」から探る美術教育の新たなくちかたち＞

宇田秀士

〔概要紹介〕 1. フォーラムの中核に据えた講演者のドイツ・ハイデルベルク教育大学のマリオ・ウアラス (Mario Ullrich) 氏は、現大学で芸術及び芸術教授学を担当している。

中心的研究テーマは「基礎学校 (小学校) における芸術的人間形成」「自然と関わる芸術教育学」であり、「現代芸術、絵画・オブジェ・インスタレーションの領域での芸術的活動」も行っている。

今回は兵庫教育大学副学長福本謹一先生の尽力により同大学国際交流協定による招待で、来日が実現した。

プロジェクトの基本的な特徴は、「数カ月にとり少しづつ発展していくテーマ」、「プロセス重視、実践重視の受容・制作、それらの省察」、「遊戯的・実験的な学習」などが内包されていることである。本プロジェクトでは、子どもの学習と隣り合わせで行われる学校の改築工事に出会い、これをテーマにした。



フロアからの質問に答えるウアラス氏

＜神戸大学 グローバル社会における将来展望 シンポジウム報告＞

民主主義は人文的精神を必要としている

—グローバル社会における教育の将来展望哲学を模索する

鈴木幹雄

〔概要紹介〕 昨年 (2016 年) 12 月 19 日 (月)、3 時限目、神戸大学人間発達環境学研究科では、上記表題のシンポジウムが開催された。

課題意識：グローバル社会を志向する現代社会の歩みの下、教育の世界には人文主義的教育の後退という現実が作られてきた。しかし現代民主主義社会には、子ども達の多様で多元的な内面世界と人間性が欠かせない。

研究視角：本シンポでは、表題テーマの下、現代アメリカ最先端教育学研究がいかなる方向に向かっているのかを学び、同時に①「知識社会において人間性を育む」、②「人間の「構想力」を活用して教育的「将来展望」を切り開く」、この両者の交差点に学術研究の焦点をあてようと試みた。

2017
IRCN

発行：小野康男
[理事長・横浜国立大学]
委員長(代理)：鈴木幹雄
編集：同 上

I . 実直に国際交流の可能性と接点を探る

アートリンクによる アメリカとの国際交流

松本裕子

広島大学附属三原中学校は、「アートリンク」に参加し、アメリカの小中学生と同じテーマで作品を制作し、相互鑑賞活動を継続している。

「アートリンク」とは、アメリカの国際的文化教育組織「クリエイティブコネクションズ」による世界56か国に所在する生徒に、美術という媒体を通じてお互いの文化や生活様式等を紹介し合い、異文化の発見を促す活動である。生活画題材に異文化理解という目標を加えることで、生徒自身が絵を描くことの意味や価値を考え、意欲を高めている。交流は教師用ハンドブックに沿って進め、作品と作品解説シート（作品紹介と自己紹介、顔写真）を交換する。

本校では、毎年1年生の美術の授業で作品の制作に取り組んできた（図1）。これまでのテーマは、「文化の光」「大切な瞬間」「食文化」「コミュニティー」「チームワーク（図2）」で、どれも生徒にとって身近だが、制作するとなると文化的価値を再認識させるものであった。

パートナークラスから作品が届いたら、「文化の探



図1 単色木版画を刷る生徒の様子



図2 チームワークをテーマに制作した生徒作品



図3 贈られてきた作品を鑑賞する生徒



図4 アートリンク主催者の学校訪問による
表彰を受ける生徒

偵になって」をキーワードに、「文化・風習のよさ、相違点・共通点、表現の工夫」等の視点で鑑賞している（図3）。

考えを広げるための手立てとして、解説シート（英文・和訳）も有効であった。解説文とあわせて作品を鑑賞することで、作者が大切にしている行事や風習に関心を持ち、作者の生活を理解しようと一生懸命に鑑賞する生徒の姿が見られた。また、パートナークラスからの「色の選択がすばらしく、すべての生徒に才能がある。」等の感想を読み、生徒は大変満足していた。さらに、昨年度は、アートリンク主催者の学校訪問による表彰（図4）や交流（図5）もあり、生徒は、取組みをより身近なものと感じることができた。

手元に作品が残るよう、この3年間は単色木版画に取り組んでいる。今後、異文化交流による生徒の意欲の向上や様々な気づきによる粘り強い取組みが更なる技能の向上につながるよう、題材の工夫や授業改善に努めたい。

（福山市立城南中学校 教頭）

ニュルンベルクのバイエルン産業博物館 における附属美術工芸マイスター・コース 針貝 綾

報告者は、目下バウハウス以前の美術工芸教育の試みに関心を持ち、研究を行ってきた。本稿では2016年9月にニュルンベルクのゲルマン国立博物館で調査を行ったバイエルン産業博物館附属の美術工芸マイスター・コースについて、その一端を報告したい。

バイエルン産業博物館の当初の活動目的は、「産業の発展、とりわけ国の生産品の製造を、形の美しさと技術の完璧さに関して支援すること」におかれ、作品の収集・展示により教育普及を行う一方、同博物館は産業に従事する職人の育成を行う教育の場でもあった。

1901年から1904年までの間に同博物館には美術工芸マイスター・コースと手工業者のためのマイスター・コース（4つの家具職人コース、4つの靴職人コース、3つの建築・美術金具職人コース）が開設された。その設置目的は、手工業のある分野の機械や道具の取扱いを教え、改良された作業方法に習熟させ、合理的な経営管理、計算、原料等の入手方法を実践的に指導することであった。

19世紀末のニュルンベルクにおいて、美術工芸は伝統的な技術の伝承と厳格な歴史主義的意匠が支配的であったが、そこに新風を吹き込んだのが1888年バイエルン産業博物館館長に就任したフォン・クラ



図5 アートリンク主催者との昼食交流の様子



図 セバスチャン・シュローベンハウザー《戸棚》1907-08年 所蔵：ゲルマン国立博物館、ニュルンベルク

マーであった。彼は 1919 年まで 31 年の長きにわたって館長を務めることになるが、職業訓練を受けた後、1878～84 年にカイザスラウターの建築労働者学校で教員としてデッサンと装飾絵画を教え、1884～7 年にカッセルの美術工芸学校長を務めた、教育視点を備えた建築家であった。

クラウド・ペーゼによれば、彼は優れた芸術家たちによる「新しい動き」を称え、その「近代美術工芸運動の指導者や先駆者たち」の助力を得てニュルンベルクの美術工芸家たちが歴史的な様式や伝統的な手法から脱却し、それによってニュルンベルクの経済が活性化することを望んでいた。そうして設立されたのが、バイエルン産業博物館に附属するマイスター・コースの中でも、筆者が特に関心を寄せている、美術工芸マイスター・コースである。

美術工芸マイスター・コースには教員として、1901～2 年にダルムシュタット芸術家コロニーからペーター・ベーレンス、1903～5 年にリヒャルト・リーマーシュミット、1907～9 年にヴェルテンベルク王立美術工芸学校附属教育実験工房（シュトゥットガルト）の金属工房の監督を務めていたパウル・ハウシュタイン、1910～13 年に応用自由美術教育実験アトリエ（通称デプシツ・シュレー）の教員を務めていたフリードリッヒ・アードラーら新進気鋭の芸術家たちが招聘され、教鞭を執った。

図は、第 6 期美術工芸マイスター・コース受講者がハウシュタインの指導の下に制作した戸棚である。バイエルン産業博物館附属美術工芸マイスター・コースは、地域の手工業者を育成するとともに、産学連携で様々な作品を制作することにより、地域の産業の活性化に寄与することになる。

バイエルン産業博物館附属美術工芸マイスター・コースについては研究の緒に就いたばかりであり、今後コレクションとマイスター・コースの関係等についてさらに調査研究を進めていきたいと考えている。

（長崎大学准教授）

I . シンポジウムを通して国際交流の実りを探る

＜東京造形大学創立 50 周年記念
シンポジウム＞

美術と美術大学の社会的役割

齋藤亜紀

昨年 (2016 年) 11 月 12 日～27 日、東京造形大学創立 50 周年記念事業の一環で美術学科卒業生による展示が行われた。そのオープニングとクロージングで 2 つのシンポジウムが開かれた。

東京造形大学は 1966 年『社会をつくり出す創造的な造形活動の探求と実践』を建学の精神として、東京オリンピックの 1 年半後に創立された。それから 50 年が経ち、今回の記念事業で「社会、創造、造形」をキーワードに掲げ、建学の精神を問い直そうとしている。

*



図 1 シンポジウムのオープニング風景

オープニングシンポジウム「美術／芸術／アートの形成—美術大学の役割」で司会を務めた東京造形大学の母袋俊也教授から美術大学が社会での役割を果たすためには、教育の目標を日本や世界の今のアートシーンに向けなければならないとの考えが述べられた。大学は大学の教育機能そのものでムーブメントを仕掛け、メディア+メディウムをアウトプットする場を提供していかなければならない。

またクロージングのシンポジウム「教育がつなぐ—社会、創造、造形—」では、「美術がどのように社会に貢献してこられたのか」、「造形教育の未来とは？」といったテーマがあげられた。

近年、「美術」のみならず、教育全般で教養教育の要請と徹底が促されている。この課題に「美術」はデザインの思考や表現で個々が社会の問題に取り組むことのできる人材の育成に貢献してきた。しかし、武蔵野美術大学の大坪圭輔教授から最近の教育の動向が豊かな人間性や感性を育てる美術による教育とは反目する学力向上のための能力主義的傾向が強いことが報告された。

また九州女子大学の谷口幹也教授は人を集め社会に作用する美術で「技能的な実践家」を社会の窓として機能させることで芸術の本質に近づけるのではないかと考えが示された。

美術の教育は、個人の感性を育てるばかりでなく、他者を受容する感受性を育てる。それこそが国際社会に還元することができる人材の素養であるといえる。その母体として美術大学には、指導者の育成に力を注いでいかなければならない。美術に求められるこれらの要請に対し、多くの議論が必要であると感じた。（常磐大学非常勤講師・茗溪学園中学教科「美術」非常勤

＜美術科教育学会

ドイツ図工科教育 リサーチ・フォーラム報告＞

ドイツの初等教育における 「アート・プロジェクト教育実践」 から探る美術教育の新たなくかたち＞ 宇田秀士

1. フォーラムの中核に据えた講演者のドイツ・ハイデ



図2 シンポジウムのクロージング風景



図3 東京造形大学の活動と歴史を紹介する冊子

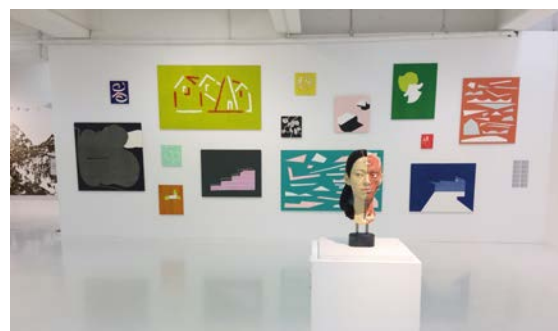
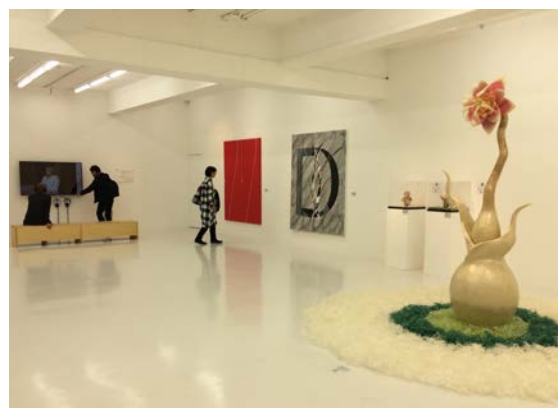


図4、5 造形大の学生作品展示の会場

ルベルク教育大学のマリオ・ウアラス (Mario Urlaß) 氏は、ライプティヒ大学で学び、現大学では芸術及び芸術教授学を担当している。

中心的な研究テーマは「基礎学校 (小学校) における芸術的人間形成」「自然と関わる芸術教育学」であり、「現代芸術、絵画・オブジェ・インスタレーションの領域での芸術的活動」も行っている (<http://www.mario-urlass.de/> 参照)。

今回は兵教育大学副学長福本謹一先生の尽力により同大学国際交流協定による招待で、来日が実現した。実施日は現職教員向けの夏の研修会日程と重なり、参加者は 65 名に留まったが、全国各地のほか、韓国からの参加者も 2 名あり、名実ともに国際的なフォーラムとなった。

2. 永守基樹氏 (和歌山大) の挨拶の後、宇田が企画の趣旨説明をし、「2008 InSEA in Osaka でのウアラス氏のロフト・プロジェクトの事例と日本の「造形遊び」との比較発表」を報告した。

その後、ウアラス氏による講演「ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」ー「工事現場」プロジェクト」があった。氏は大学で教える傍ら、2015 年 9 月から毎週月曜午後、ハイデルベルク近郊の基礎学校 1 年生を教えている。そして、2016 年 5 月に開始した「工事現場」プロジェクトでは、22 人のクラスに 90 分の授業を毎回行ってきた。その目的は、「子どもを中心に据えた芸術志向であるドイツの教授法理論」を学校での現実の授業で実現することだった。

氏がこれまでのプロジェクトも含めて長年行ってきたことは、基礎学校における芸術教育の理念が持つ可能性と課題点を探ることで、子どもたちの感性の鋭敏化、批判的な省察、想像力、文脈性、変容などを重視してきた。

また、「誘導された学習ー自己責任の学習」、「開放ー統制」「真実ー想像」などの軸での「振幅」を大切にしている。すなわち、何れかに偏らずに両方の要素を自然に入れていく方法である。

さらに、プロジェクトの基本的な特徴は、「数カ月にわたり少しずつ発展していくテーマ」、「プロセス重視、実践重視の受容・制作、それらの省察」、「遊戯的・実験的な学習」などが内包されていることである。これに基づいたプロジェクトでは、子どもの学習と隣り合わせで行われる学校の改築工事に出会い、これをテーマにした。工事現場を見なが



右上：図1 ウアラス氏のアート・プロジェクト「工事現場」



図2 教室が工事現場になった



図3 フロアからの質問に答えるウアラス氏

ら設計図を想像して描くことから始まり、現場の専門家の説明の場の設定、現場での見学と道具の体験、ジオラマのようなミニ空間の創造、現場の泥を混ぜての描画活動、インスタレーション活動、それらの発表と省察と続いた。

また、各活動の後で、次のような関連する芸術家の作品・活動の鑑賞活動があることも特徴的だった。金沢 21 世紀美術館の常設展示「スイミングプール」で知られるレアンドロ・エルリッヒ、アンフォルメに触発されたアントニ・タピエス、英国のスリンカチュの作品集『こびとの住む街』などがそれだった。実際の子どもの主体的な活動を見ての鑑賞作品の選択が絶妙と感じた。

3. その後、岡田陽子氏（大阪千代田短大）、辻大地氏（こどもアートスタジオ）との「質疑応答」、福本氏、湯川雅紀氏（関西福祉科学大）、鈴木幹雄氏（神戸大）との「シンポジウムにおける対話」を行った。これらシンポジストやフロアとの対話を通じて次のことを感じた。

1、ドイツでも理論と実践の間には、ミッシングリンク（失われた環）があり、この接続をしようとするウアラス氏の奮闘、

2、ドイツでは、日本で言う総合的な学習の伝統があり、選択科目である「分科学習」では教科や領域を横断した学びがあり、これに芸術活動も絡んでいること、

3、「社会彫刻」「誰でも芸術家である」などのヨーゼフ・ボイスの主張や「生きる術としての芸術」がウアラス実践に大きな刺激を与えていること。

言葉の壁もあり、運営は容易くはなかったが、発言者それぞれの今後の実践に向けての必死な姿が見てとれ、励まされた。

当日の概要・記録集を以下に掲載した。お読みいただき、ご意見ご感想をいただければ幸いである。
<http://www.artedu.jp>

（本報告は、『2016 年度 美術科教育学会リサーチフォーラム in Osaka, Japan 2016.7.30：ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」から探る美術教育の新たなくかたち』の紹介）

（奈良教育大学教授）



図4 フロアからの質問



図5 質疑応答に耳を傾ける登壇者全員

<神戸大学 グローバル社会における将来展望 シンポジウム報告>

民主主義は人文的精神を必要としている ーグローバル社会における教育の将来展望哲学を模索する

鈴木幹雄

昨年（2016 年）12 月 19 日（月）、3 時限目、神戸大学人間発達環境学研究科では、上記表題のシンポジウムが開催された。企画者は領域横断的なメンバーによって組織された（鈴木幹雄（学び系 B）、渡邊隆

信（学び系A）、国土将平、坂東 肇（表現系）。

また講演者・報告者は、鈴木幹雄（神戸大学）、林藤成美（神戸大学大学院生）で、参加者：約76名（学内外の研究者8名、大学院生13名、学部生52名、報告者：2名）であった。

概要は次の通り。

1. シンポの課題意識 グローバル社会を志向する現代社会の歩みの下、教育の世界には人文主義的教育の後退という現実が作られてきた。しかし現代民主主義社会には、子ども達の多様で多面的な内面世界と人間性が欠かせない。

かつてヌスバウム教授は、その主著において、＜民主主義は人文的精神を必要としている＞ことを、民主主義社会の人材育成と将来展望の視点から明らかにした。

他方、韓国聖潔大学のホン教授は、ヌスバウムのこの教育原論的視点を強調し、2012年、韓国教育学コンフェレンスで、「教養教育を再考する：知識社会において人間性を育むことの意味（2012）」と題した基調講演を行った。

2. 本シンポの研究視角 本シンポでは、表題テーマの下、現代アメリカ最先端教育学研究がいかなる方向に向かっているのかを学び、同時に①「知識社会において人間性を育む」、②「人間の「構想力」を活用して教育的「将来展望」を切り開く」、この両者の交差点に学術研究の焦点をあてようと試みた。

3. シンポ内容紹介 当初予定していたホン教授の招聘は同氏職務の関係で果たせなかったが、文献翻訳も含め、極力ゼミ生・教員の自力で取り組み、内容的に「実のある」シンポを開催できた。参加者数、多層の参加者層からして、本シンポは本学教職志望学生、人間形成研究に取り組もうとしている大学院生達に対してそれなりの研究意欲をかき立て、今日の困難な社会状況・教育状況の下、新鮮な現代的課題意識を学び取る刺激となったように思われる。

4. シンポの主要内容 シンポの主要内容は次の2点であった。

1. 韓国人教育学者ウンソク・ホン氏にみる教育の将来構想哲学研究紹介、

2. グローバリゼーション下現代アメリカにみる将来構想哲学—シカゴ大学教授 M・ヌスバウム氏の研究視점에学ぶ。

また、2017年3月に公開（配付）された報告書の主要内容は次の通りであった。

1. 韓国人教育学者ウンソク・ホン氏にみる教育の将来構想哲学研究紹介、

2. ＜豊かな人間性を育むこと＞をグローバリゼーション下に模索する—2010年代初頭韓国教育哲学者は＜人間性を育む教育の可能性＞をいかに構想したか—、

3. グローバリゼーション下現代アメリカにみる将来構想哲学—シカゴ大学教授 M・ヌスバウム氏の研究視점에学ぶ。

（関西福祉大学 鈴木幹雄）

編集後記

『国際交流情報 IRCN 12号』、『同 13号』を2016年9月に公開し、同年9月25日に北海道教育大学で開催された大学美術教育学会で会員の皆様に配布させて戴きました。それから八ヶ月も経てしまいました。松本先生、針貝先生は既に昨年に原稿を頂いておりましたが、一つには原稿の数が揃わず、失礼致しました。もう一つには、当方の退職・転勤の為、引越し、片付けに約6ヶ月

も追われ、疲労と過労の日々が続いておりました。やっとこの度、トピック「いまわが国で取り組まれている国際的な美術・図工科教育の糸口」の下、『国際交流情報 IRCN 14 号』の編集も終わりましたので、ホームページでの公開に迄こぎつけました。皆様にお詫びと、辛抱強くお待ち戴きました感謝の念を申し上げさせていただきたいと思います。

さて、今回は二つのトピックで特集を組みました。「Ⅰ. 実直に国際交流の可能性と接点を探る」と、「Ⅱ. シンポジウムを通して国際交流の実りを探る」です。前者には、お二人の先生が原稿をお寄せ下さいました。後者には、当方も含め 3 人の先生方が原稿をお寄せ下さいました。

構成は次の通りです。

Ⅰ. 実直に国際交流の可能性と接点を探る

- ・「アートリンクによるアメリカとの国際交流」(松本裕子先生)
- ・「ニュルンベルクのバイエルン産業博物館における附属美術工芸マイスター・コース」(針貝綾先生)

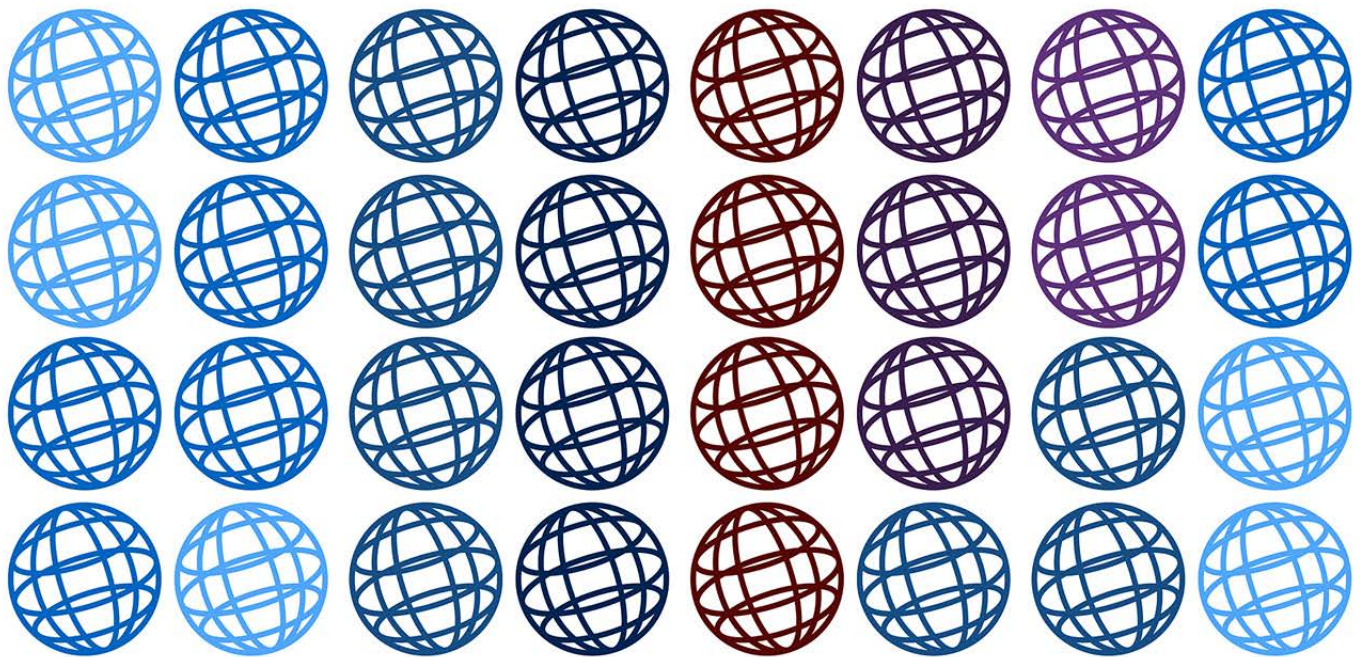
Ⅱ. シンポジウムを通して国際交流の実りを探る

- ・シンポジウム<ドイツ図工科教育リサーチ・フォーラム>報告:「ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」から探る美術教育の新たなくかたち」(宇田秀士先生)、
- ・<東京造形大学 創立 50 周年記念シンポジウム>報告:「美術と美術大学の社会的役割」(齋藤亜紀先生)
- ・シンポジウム<神戸大学 グローバル社会における将来展望>報告:「民主主義は人文的精神を必要としている—グローバル社会における教育の将来展望哲学を模索する」(鈴木幹雄)

本号の構成は、集まりました原稿の素材をもとに、最終決定するという編集方針をとりました為、12 号、13 号とはある種異なった組み立てとなりましたが、これが偶然に救いとなったような気がします。美術・美術教育(図工科教育)に取り組んで居られる先生方の活動を違った角度から見せてくれたように思います。なお、最後の記事は当方のものですみませんが、「すき間を埋め数をふやす為」とご理解・ご容赦下さいましたら幸いです。

今後、全国の先生方がふるって原稿をお寄せ戴けます事を切に願っております。また、各地の取り組みや、韓国テグ市の InSEA 研究活動報告等をご報告下さいますようお願い申し上げます。

(鈴木幹雄)



トピック：いまわが国で取り組まれている国際的な美術・図工科教育の糸口

IRC第14号

2017年7月31日発行

発行：大学美術教育学会 国際交流委員会

横浜国立大学 理事長 小野康男

委員長：鈴木幹雄 編集：同左

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

2017
IRCN

発行：小野康男
[理事長・横浜国立大学]
委員長(代理)：鈴木幹雄
編集：同 上

2017 年春・夏期号

IRCN第14号

2017年7月31日発行

発行：大学美術教育学会 国際交流委員会

横浜国立大学 理事長 小野康男

委員長：鈴木幹雄 編集：同左